

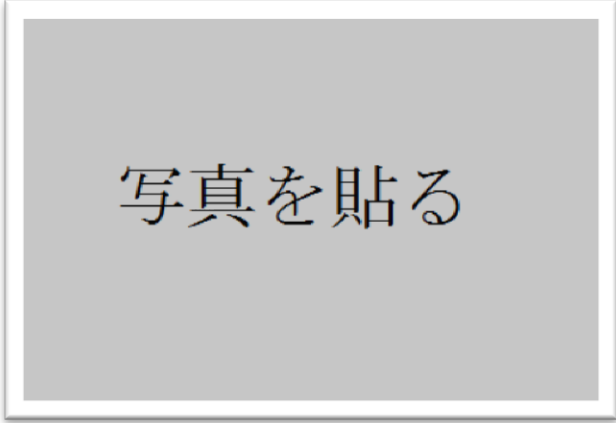
2012 年度

J-CaJa Short Visit 春 活動報告書

2013.2.26~3.6



はじめに



写真を貼る

今回のSV 渡航はJ-CaJa にとっての、転換期であり、ターニングポイントとなることであろう。絶対的存在感でプロジェクトを引っ張っていたボス平川成一、そしてプロジェクトの中心である四回生の卒業。

PUC との関係性の強化。

今後の活動を決めるため、また、これまでの活動を振り返るための調査。
今後の活動を大きく左右する、大事な渡航となった。
今回の渡航の成果を糧に、本プロジェクトの更なる発展を願う。

文責：浦野

団体説明

J-CaJa



関西大学大学院社会情報学研究科 ICT 教育（久保田・黒上）研究室が行っているプロジェクト。2011年3月、“カンボジア NGO 協働 Project”として発足。現在は、「J-CaJa（=Join-Cambodia & Japan）」と名を改め、「小学生が学校を辞めなくてもいいようにカンボジアの教育環境を整える」を目標として様々な活動を行っている。

HP: <http://cambodia-ngo-project.weebly.com/>

➤ 協力団体

PUC (Pannasastra University of Cambodia)



2000年に設立された有名私立大学。国際交流にとっても意欲的に取り組んでいる。授業はすべて英語で行われており、実際に交流した学生の全員が英語を流暢に話していた。シムリアップキャンパスと提携している。

HP: <http://www.puc.edu.kh/>

EPS (Education for Population Support Foundation)



カンボジア内務省から認められた教育支援 NGO 団体である。学校現場へ物資の援助や奨学金の支援を中心に活動している。

HP: <http://epscambodia.weebly.com>

目次

渡航メンバー紹介	5
事前準備	8
現地での活動スケジュール.....	11
現地での活動内容	13
1) プノンペン調査(ひろしまハウス)	
2) Kok Chan 小学校での交流学習	
3) Re-Book プロジェクト(Kiri Meanun 小学校、Omiya 小学校)	
4) プレゼンテーション	
5) ディスカッション	
6) リフレクション	
訪問団体紹介	22
1) ひろしまハウス	
2) 山本学校	
3) ABC and Rice	
フィールド調査結果.....	26
1) Kiri Meanun 小学校	
2) モックネヤック小学校	
3) PUC 学生とのディスカッション	
4) Tveas 小学校での調査	
ミーティングの記録.....	32
反省と展望.....	45
会計	49
写真館.....	51

渡航メンバー紹介



➤ 院生 1 名、学部生 7 名の計 8 名がカンボジアに渡航した。



関西大学総合情報学研究科
平川成一



関西大学総合情報学部 4 年
角谷奈美



関西大学総合情報学部 4 年
末兼藍子



関西大学総合情報学部 4 年
曾利堯史



関西大学外国語学部 4 年
大福聡平



関西大学総合情報学部 4 年
肥田紗加



関西大学総合情報学部 4年
増田珠水



関西大学総合情報学部 3年
浦野友欣



関西大学総合情報学部 3年
松本未夢

事前準備



事前準備

概要

現地で活動する目的や目標、また活動内容の詳細や提携先の決定などを主に行う。

方法

週 2 回のミーティングで進めていく。現地の NGO 団体や大学とのコンタクト手段は Skype や Facebook、E-mail を使用。

期間別のミーティング議題

渡航 1 ヶ月前	今まで続けてきた活動の進退やこれからの指針についての議論を繰り返していった。各活動の年間スケジュールを立て、現地でどのように活動していくかを各担当者が決定し、全員で議論していった。
渡航 2 週間前	活動の指針から詳細な内容へと議題は移る。担当者は活動をしっかりイメージできる段階になる。そして現活動の問題点、現地で起こりうる問題の解決策を議論していった。しかしこの問題点が簡単に解決できない活動も現れ、議論は難色を示す。またこの時期から協働相手との打ち合わせも同時に行っていった。
渡航直前	現地活動の企画書を作成し、それに基づき決定事項の確認を行った。この時期には協働相手との最終打ち合わせも終わり、各活動は分刻みのスケジュールを決定している段階であった。

以上の流れにより、現地での活動の詳細を決定した。

連携先とのアレンジ

団体紹介にて記述した現地連携先とは、渡航の際の重要な活動パートナーとして事前に情報を共有していった。またより詳細なスケジュールについては現地で決めることもあった。

	EPS	PUC
10月	プノンペン訪問 Thearom とのミーティング	/
11月	Thearom とのミーティング カンボジアでの現地調査 (Kiri Meanun、Omiya 小学校訪問、フィールドサイト訪問) 活動助成金申請	
12月	小学生への奨学金授与	
1月上旬	Re-Book プロジェクトの活動資金 検討	
1月中旬	Omiya 小学校の学校情報の入手 Re-Book プロジェクトのスケジュール 検討	渡航メンバー、期間、滞在先の要望共有(E-mail)
1月下旬	Re-Book プロジェクトの活動資金 確定	渡航メンバー、期間、滞在先の確定 活動内容共有(E-mail)
2月上旬	Re-Book プロジェクトのスケジュール 確定	Skype ミーティングにて詳細な活動 内容詰め
2月中旬	Re-Book プロジェクトの評価シート 作成	現地にて活動スケジュール確定
渡航直前	Thearom との活動の最終確認	

文責：角本、中川

現地での活動スケジュール



▶ 現地では以下のようなスケジュールで活動を行った。

日程	主な活動	連携先/場所
2月26日	プノンペン到着 ひろしまハウス訪問	プノンペン
2月27日	バスにてシェムリアップへ移動 ウェルカムパーティー	シェムリアップ PUC/PUC キャンパス
2月28日	山本学校訪問 プレゼンテーション、 交流学習についてのディスカッション	PUC/山本学校 PUC キャンパス
	図書研修 1 日目	EPS/Omiya 小学校
3月1日	Kok Chan 小学校での活動	PUC/Kok Chan 小学校
	図書研修 2 日目	EPS/Omiya 小学校
3月2日	Reading Club、Dance Club への参加	PUC/モックネヤック小 学校
	図書研修 3 日目	EPS/Omiya 小学校
3月3日	Omiya 小学校図書館開設セレモニー Omiya 小学校、KiriMeanun 小学校にて 図書に関するワークショ ップ	EPS/Omiya 小学校、 Kiri Meanun 小学校
3月4日	モックネヤック小学校調査 ディスカッション	PUC/モックネヤック小 学校 PUC キャンパス
3月5日	Pouk 小学校調査 ディスカッション	PUC/Pouk 小学校 PUC キャンパス
3月6日	ABC and Rice 訪問 リフレクション	PUC/ABC and Rice PUC キャンパス

現地での活動内容



NPO 法人「ひろしまハウス」への訪問

概要

- ・NPO 法人「ひろしまハウス」への訪問
- ・日時：2月26日 13:30～
- ・参加メンバー：大福、曾利、増田、松本、末兼、角本、浦野、肥田

活動目的

J-CaJa での活動の 1 つである図書館プロジェクトと類似した活動を行っている団体であるため、自身の活動に活かせる事はないか、また、共に活動していける事はないかを探ること

活動内容

活動初日、メンバーはプノンペンに到着し、NPO 法人「ひろしまハウス」への訪問を行った。

スタッフであるサカダーさんの案内のもと、まず 1 階部分にある教室を見学した。この教室での授業はストーリーチルドレンに向けて行われており、算数やクメール語などの授業が学年ごとに分かれて行われていた。その後 2 階部分へと移動し、図書館の見学を行った。ひろしまハウスの絵本はほとんどが日本の絵本で構成されていた。日本で集められた子供向けの絵本をカンボジア日本語学校卒業生によ

り翻訳され、開館するまでに至ったという。

最後に 3 階部分にある展示会場を見学した。ここでは、時折子どもたちが描いた絵の展示や、様々な写真の展示会が行われている。ここで案内人であるサカダーさんが受け持つ授業が始まるということで、訪問活動を終了した。

成果

まず 1 つ目に、絵本の翻訳の方法について考え直す機会が生まれたことである。J-CaJa で寄付を行った絵本は翻訳した英語とクメール語を付箋に手書きした後に貼り付けていた。しかし、ひろしまハウスの絵本は手書きではなく印刷文書を利用し、見栄えにも気を配っていた。ここから、絵本に対して興味を持ってもらうには翻訳した言語の貼り方にも問題があるのではないかと考えた。翻訳部分が綺麗に書かれていると、読みたいという気持ちを持たせることが出来るのかもしれない。また、クメール語を勉強中である子どもたちに対し正しく綺麗なクメール語を見せ、学びに繋げることが出来るのではないかという意見が上がった。

2 つ目は、寄付を行う日本の絵本における“日本語”の存在意義に関して

考える機会が生まれたことである。ひろしまハウスに在る日本語の絵本は日本語の部分がクメール語の翻訳により隠されていた。J-CaJaで寄付を行った絵本は日本語という文化に触れることも大事ということで日本語部分を残していた。しかし、農村部の子ども達はひろしまハウスの子ども達のように日本について勉強している訳ではない。ならば、日本語の部分は必要ないのではという意見が出た。また、活動内で日本の絵本は人気があるのかという問いに対し〇〇さんから「人気である」という答えが返ってきた。その要因としてほとんどが日本語の絵本で構成されている事、また日本語を学習する教室も開かれており、普段から日本への親近感がもたらしたものであるように考える。自身が寄付を行った小学校とは状況からして大きな違いがある。

この先、日本の絵本の寄付を行っていくのであれば、このような点について、渡航メンバー・日本滞在メンバーで話し合っていく必要がある。

反省と展望

ひろしまハウスは日本語を教えている団体であり、また日本からの支援により成り立っており、日本と言う存在は近いものとなっている。このことから、もしプノンペンで活動するこ

とがあれば、交流学习における意味づけも行いやすく両者のメリットも見えてくるので交流団体としては最適であると考えている。

文責：肥田

Kok Chan 小学校での交流学習

概要・活動目的

奥坂小学校の児童達が作成してくれたポストカードを Kok Chan 小学校の児童達に送り届け、そしてその児童達からの返信ポストカードを受け取り奥坂小学校の児童達に無事渡すことで、一連の交流学習の完結を目的とする。

活動内容

午前中は、私達と PUC 学生、そして Kok Chan 小学校の児童達とアイスブレイキングを行った。いくつかのクラスに分かれて、クメールダンスや歌を唄った。その後は、Kok Chan 小学校の児童達が、奥坂小学校の児童達に向けてのポストカードを作成した。内容項目は、名前、好きなことなど簡単なプロフィールである。そして、午後からは、ガイドブック作成である。テーマ(寺院・トンレサップ湖など)は事前に、PUC 学生と Kok Chan 小学校の児童達が話し合っ決めて、当日はそのテーマ別のグループごとに分かれて作成していった。

成果

Kok Chan 小学校の児童達にポストカードを贈呈出来たことと、その児童達が一生懸命ポストカードとガイド

ブックを完成させてくれたお陰で、もうすぐ卒業してしまう奥坂小学校の 6 年生のみんなに、無事ポストカードを渡すことが出来た。

反省と展望

反省点としては出したいくないが、準備不足で内容の詰め込みの甘さが表れた日だった。具体的には、前日に話し合った内容と違った部分があり、ムービーを流すことが出来なかった。また、最初のアイスブレイキングで学年によって理解度がだいぶ違った。今回の Kok Chan 小学校での活動は、現場に行っ初めて知ることがたくさんあったので、これから交流学習を行っていく上で、そういった面を事前にきちんと話し合い、お互いにとってメリットがあり、スムーズに進めていけるような活動を行っていきたい。



(完成したポストカードを掲げる児童達)

文責：松本

Re-Book ~Omiya 小学校~

概要

- ◆ Omiya 小学校への図書館の設置と絵本の導入
 - ・ 教員を対象とした図書館運営に関する研修の実施
 - ・ 図書館のオープニングセレモニーの開催
 - ・ 児童を対象としたワークショップの実施

活動内容

- ◆ 図書研修
図書館設置後、効果的な運営がなされるために、教員を対象とした図書館運営に関する研修を実施した。研修内容の詳細は別資料を参照。
- ◆ オープニングセレモニー
Omiya 小学校図書館会館を記念し、オープニングセレモニーが行われた。EPS 代表の Thearom、教育省役員の Malay、Omiya 小学校校長、コミュニティの代表と共に、J-CaJa メンバーは実施者側として出席した。Omiya 小学校の児童だけでなく、児童の家族も式に参加し、図書館の開館を祝った。
- ◆ ワークショップ
大きな画用紙に児童達の手形を集め、図書館に飾ることで、児童一人ひとりが図書館に愛着を持ってもらうことを目的とした。またそれにより、

児童の図書館利用の動機付けが促されることを狙いとした。

成果

- ◆ コミュニティを巻き込んだ活動
研修、セレモニー、ワークショップ、それぞれを通してコミュニティを上手く巻き込みながら実施することができた。例えば研修では、教員だけでなく村長や村の教育責任者も参加し、セレモニーやワークショップでは、児童だけでなく家族や僧侶なども巻き込みながら実施することができた。

- ◆ 図書研修内容の把握

担当者（大福）が図書研修を3日間通して参加したことで、研修内容や研修の流れを細かく把握し、記録することができた。

反省と展望

- ◆ 図書館運営フォローアップ

前回図書館を設置した Kiri meanun 小学校（Kiri）同様、図書館が適切に運営されるためのフォローアップを行う。しかし、Kiri で実施した毎月の報告書の形とは違い、明確な評価規準を定め、それに沿った評価を行う形で実施する。評価規準表は、今回 Kiri にて実験的に実施した図書館評価（下記参照）で使用了なものに基づき作成する。 文責：大福

Re-Book ~Kiri Meanun 小学校~

活動1 ワークショップ

活動内容

◆ 時計教材ワークショップ

三島高校国際交流部が作成した時計教材を用いて、児童が時計の読み方を学ぶことを目的としたワークショップを行った。現在の時刻や起床時間を訪ねる質問に、児童が時計を合わせて答えるという流れで行った。ワークショップ後、時計教材を贈呈した。

◆ 三島高校国際交流部の部員紹介

教材作成を実際に行った三島高校生を紹介することで、支援がどのような人からされていたのか、児童や教員に知ってもらった。

◆ 翻訳絵本の贈呈

三島高校生が翻訳した絵本を贈呈し、新しい図書として図書館に導入した。

成果

三島高校生が作成した教材、翻訳した絵本を導入できた。

課題と展望

教材作成の際に事前にニーズ調査を行っていなかったため、児童達にとって効果的なワークショップが行えなかった。今回の結果や児童の反応を三島高校に報告し、ニーズ調査の重要性、支援の難しさを伝えていく必要がある。この事例を切り口に三島高校生と国際協力について考えていく。

活動2 図書館運営評価

活動内容

評価項目について、図書館の様子や教員の行動、または記録などを見てループリックに当てはめながら評価した。評価項目で測りきれない情報は、インタビューにより補った。※ループリックによる評価、インタビューの結果は別資料参照。

成果

ループリックに従い、図書館の現状を評価することができた。全体的に高い評価となったが、本の状態、コミュニティを巻き込む仕組み、新しい本を導入するシステムに課題が見られた。

また、評価内容を校長にフィードバックし課題を共有した。今回の課題を踏まえ、今後図書館を運営する中でどのような点に気を付け、どのような運営を目指していくべきかということを議論した。

課題と展望

評価規準表やインタビュー項目の見直しが課題である。今回の評価結果を踏まえてOmiya小学校図書館の評価規準を作成する必要があるが、その際にEPSや教員を巻き込み、評価基準を設定することで、より評価される側の理解が得やすい評価が可能になると考えられる。

文責：大福

プレゼンテーション

活動概要・目的

新メンバーが多く加入したということで、私達の団体について理解してもらおうのと、今後も関係を強化しながら、ずっと繋がっていけるようにという意を込めて、私達は改めて PUC 学生に J-CaJa についてのプレゼンテーションを行った。

活動内容

末兼・松本は PUC の学生の前で J-CaJa についてのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの内容としては、ヴィジョン、今までの活動内容、今後の PUC との関係性などを主に話した。またプレゼンテーション後に、質問の機会を設け、二つのグループに分かれて、ディスカッションを行った。

成果

最後まで練習を重ねたことで、伝えたいことを伝えることが出来た。また、プレゼンテーション後に行われたディスカッションでは、旧メンバーが新メンバーにに対して、J-CaJa の説明を熱心にしてくれたり、中心に立っていてくれて、SS の成果を身をもって感じた。

反省と展望

新メンバーが多かった為か、プレゼンテーション後のグループに分かれての質問タイムの時に、「そもそもヴィジョンは?」、「Re-Book って何?」という質問をされた。旧メンバー達は理解してくれたが、新メンバーにとっては少し難しい内容だったのかもしれない。今後は新メンバーとの活動がメインになってくるので、もっと連携を強めていき、お互いに理解しあえる活動を行っていきたい。

文責：松本

ディスカッション

活動背景

J-CaJa との連携をきっかけに、PUC 学生は独自のプロジェクトをいくつか立ち上げている。その中でダンスクラブやバイキングクラブなどは、日本で言うクラブやサークル活動の要素が濃いのではないかと、渡航前の J-CaJa メンバーの考えがあり、今一度、お互いのプロジェクトに対する意識を擦り合わせようと言う考えのもと、このディスカッションを行った。

活動目的

J-CaJa と PUC 学生による協働プロジェクト発足を見据え、「プロジェクトとはどういったものであるべきか」を議論し、互いの認識を理解することで、J-CaJa の考えるプロジェクトのあり方を PUC に伝える。

活動内容

- ◆ ディスカッションの流れ
プロジェクト運営をするにあたり、自分の中で何を核として活動するのか、
①自己実現
②利益(見返りとしてお金や信用など)
③社会貢献
の三つの内から、最も重要だと思うものを各自が選び、自らのプロジェクト活動と照らし合わせて発表し、共有したのちにディスカッションを行った。
- ◆ ディスカッションの内容

- J-CaJa メンバーだけでなく、PUC 学生の多くが上記の③を選択した。少数だが①を選択した学生もいた。

→①②が間違いという訳ではなく、最終的なゴールは③であり、ファーストステップの違いである。

(例)High school for community はスキル獲得を目指すプロジェクトであるが、最終的にはそのスキルを社会貢献として生かすことを目的としている。

- バランスを考える必要がある
→どれか一つに重点を置きすぎても良いプロジェクトにはならない。

(例)ゴミ拾いプロジェクトは、社会貢献にはなるが、①の学生の学びや②の利益は少ないのでは？

成果

J-CaJa は Global Issues を解決する為に活動している、つまり③に重きを置いて活動していることを伝えることができた。

反省と展望

- ◆ プロジェクトとして重要なこととプロジェクト活動を行う上で個人として重要視するもの、にズレが生じた。
- ◆ 議論に積極的な旧メンバーとの信頼関係の確認ができた。

文責：浦野

リフレクション

概要

S Vでの活動を振り返り今後の展望についてディスカッションを行う

活動目的

- ・ディスカッションでの内容を振り返り交流学习における展望を考える
- ・年間スケジュールを作成し、今後の連携方法について話し合う

活動内容

①コックチャン小学校での活動を振り返り、交流学习についての意味づけについてディスカッション

②交流学习の活動案について意見をブレスト
年間計画、連携方法についてディスカッション

成果

- ・どちらのグループも未完成ではあったが年間計画を作成できた。
- ・連携方法についてフェイスブックでのグループ、LINEで連絡をとるなど具体的なところまで決定した
- ・PUC側とJ-C A J A側で交流学习についての責任者を決定したことで今後の連絡がスムーズになった
- ・ディスカッションを通してPUC学生の本音が聞けた

反省と展望

反省

・PUC学生の中でモチベーションの差があったためディスカッションに積極的でない人もいた

・J-C A J Aメンバーの中で意味づけが十分にできていないためPUC側の意味づけも薄いものとなった

展望

・J-C A J Aで話し合い年間計画を作成する

・作成した年間計画を元にPUC学生と今後の交流学习について決定していく

文責：増田

訪問団体紹介



ひろしまハウス



連絡先

所在地: Onalom Pagoda, St.13, Sangkat
Chey Comneas, Khan Doun
Penh, Phom Penh Cambodia

電話番号: 011-753-775

HP: <http://hiroshimahouse.com>

概要

「ひろしまハウス」は原爆の焦土から立ち上がった広島市民を中心として、平和を愛する人々によってカンボジアのプノンペンに建設された交流施設である。

目的・ミッション

「ひろしまハウス」を希望と平和を象徴する建物とし、ここを拠点に、カンボジアの人々と交流して様々な活動を展開すること。このことが戦争のない平和な世界を作る一歩となると考えている。

活動内容

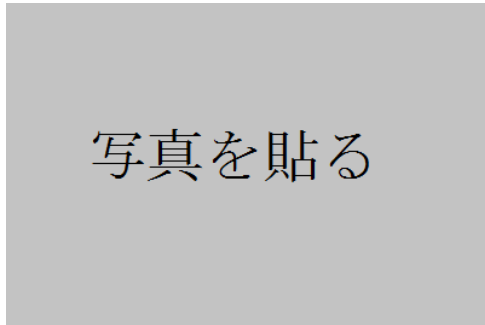
多くの広島市民が資金集めやレンガ積みに参加し、着工から 11 年後の 2006 年に「ひろしまハウス」が完成した。現在、1 階で日本国際社会事業団と共同で子どもたちの教育や給食事業を行い、2 階で子ども図書館を運営している。今後、さらに 3 階、4 階で原爆被害の展示や図書室の開設などを計画している。

参考となった点・J-CaJa との連携

2 階の子ども図書館にはクメール語に翻訳された日本の絵本が約 900 冊おいてあった。ひろしまハウスではクメールの絵本よりも日本の絵本の方が人気だそう。というのも、絵のクオリティーが高いということと、日本語が書いてある部分にクメール語の印字された紙をきれいに貼って読みやすいように工夫がされているからである。

文責：末兼

山本学校



連絡先

所在地:

電話番号:

HP:

概要

団体の簡単な説明

目的・ミッション

団体の活動目的

活動内容

団体の活動内容

参考となった点・J-CaJa との連携

なにかあれば！

文責：〇〇

ABCs and Rice



連絡先

所在地: 不明

電話番号: +855 (0)77 707 514

HP: <http://abcsandrice.webs.com/>

概要

この団体は現在、ボランティアとドナーからの援助に大きく依存しており、約180人の学生を支援している。また、私達のような学生や、英語を教えられる人を世界中から受け入れている。

目的・ミッション

子供達を教育して知識を与えることで、貧困の連鎖を断ち切ろうという目的を掲げる。また、この団体が考える使命は、世界的な意識と貧困の連鎖に巻き込まれる人々の窮状について、役に立つ力を活性化することである。

活動内容

主な活動内容として、カンボジア国内の貧困家庭に生まれ、学校に通うことが出来ない子供達を対象として、計画的なカリキュラムのもと、その子供達に英語とクメール語で無償教育を行っている。

参考となった点・J-CaJa との連携

私達は ABCs and Rice にミューズ小学校の交流先の相手として訪問した。訪問理由としては、英語に力をいれているという点が共通しており、児童達が直接交流出来るという利点があるからだ。そこで、私達は先生の前で交流学习についてのプレゼンテーションを行い、積極的なアプローチをした。先生達の反応は良く、今後の交流相手として深く繋がっていけそうだ。

文責：松本

フィールド調査結果



Re-Book プロジェクト調査

調査の目的

調査対象校

1. KiriMeanun 小学校

1. KiriMeanun 小学校

調査対象校の概要

所在地:

校長名:

教員数:

生徒数:

調査結果

調査から見たこと

反省と展望

文責：〇〇

小学校調査

目的

J-CaJa のフィールドであるシェムリアップ周辺の小学校を調査することで、地域のニーズを見だし、J-CaJa の活動へのヒントとする。

活動の流れ

1. モックネヤック小学校での調査
2. PUC 学生とのディスカッション
3. Tveas 小学校での調査

1. モックネヤック小学校での調査

事前に作成したインタビュー項目を使用し、教員と児童を対象とした調査を行った。調査内容・結果は別ページ参照

[調査結果からの考察]

- 児童と教員のコミュニケーションは積極的でない
 - ◆ 子どもたちには「なんでも聞いてね」と伝えているが、ほとんど子どもたちから先生へ話しかけない
 - 先生は休み時間も校務をしており忙しそうに見えるため
 - 児童にとって先生は絶対的な存在で恐れているため
 - ◆ 子どもが学校に来なくなったときのみ、家庭へと訪問して働きかけるようにしている

2. PUC 学生とのディスカッション

モックネヤック小学校での調査を振り返り、次回調査に向けて PUC 学生と改善点等を話し合った。

[課題と改善点]

- 調査で明らかにすべきことを絞る
 - J-CaJa のビジョンを踏まえ、「退学の原因を明らかにする」ための調査を行う
 - ◆ 考え得る退学の原因を PUC 学生と共に分析
- 児童が退学する原因は全て「欠席」に繋がる。「欠席」が続くことにより、勉強についていけなくなったり、先生が怖くなってしまい学校を退学してしまう児童が多い。「欠席」の理由を明らかにすることが、退学の原因を探る方法として有効である。「欠席」をする理由は、大きく「家族」「コミュニティ」「学校」の 3 つにカテゴライズさ

れる。

「家族」…お金が必要で子どもに出稼ぎにってもらわないといけない

「コミュニティ」…ゲームやドラッグが在り、それに子どもたちが夢中になってしまう

「学校」…先生にスキルがなく子どもたちをモチベートできない

そして上記の3つの項目も「個人的な要因」と「社会的な要因」に分けられる
(その中で「コミュニティ」に対しては、普段は働いているためなかなか時間がとれずインタビューをするのは難しい。)

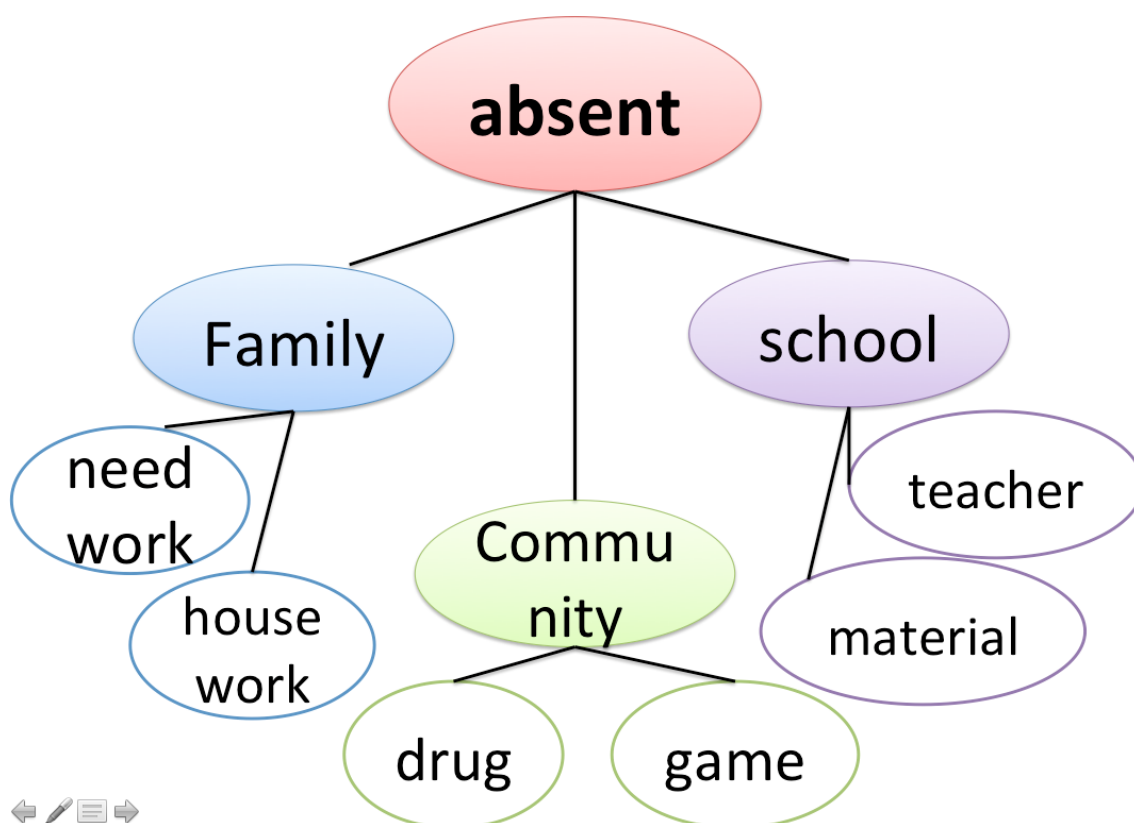


図. 1

➤ 調査方法に関する課題

◆ 質問の方法・対象

- 児童に対してはもっとわかりやすい質問にしないと答えにくい
→しっかりと返答を得やすいこと、退学率が問題になるのは高学年であることを踏まえると、4年生以上の児童に絞ってインタビューを行うやり方もある
- 先生に対してはよく考えて質問をしないと本音が聞けない恐れがある

→先生によって性格も違うので、直接的な言葉で聞くのか、間接的に聞くのか臨機応変な対応が必要

- 調査の対象が曖昧である

→調査の目的を明確にし、例えば対象をカントリーサイドの学校などに絞る

◆ 時間

- 短い休み時間の中に何人もの人に対してインタビューするのは難しい

→「授業中に行うのはどうか？」という意見が PUC 学生からあったが、これは子どもたちが学ぶ機会を邪魔していることになるので J-CaJa としては賛成できない。単純な質問をできるだけ絞ってインタビューを行う

[新しい質問項目の作成]

- 上記の課題と改善点を踏まえ、翌日の調査で使用する質問項目を作成した。質問項目は別ページ参照。

3. Tveas 小学校での調査

モックネヤック小学校での調査、その後のディスカッションの内容を踏まえ、二度目の調査を行った。調査内容・結果は別ページ参照

[調査結果からの考察]

- タイへの出稼ぎが主な退学理由となっている
 - ◆ 複数の児童・教員からタイへの出稼ぎを理由に退学した児童がいたというインタビュー結果が得られた
- 将来の選択肢が少ない
 - ◆ ほとんどの児童が小学校または中学校を卒業した時点で、親の仕事（主に農業）を手伝いたいという将来の夢を持っていた
 - ◆ 具体的な職業として挙げられたのは、先生・医者

課題・展望

- 質問項目の更なる改善
 - ◆ 事実を色々と断片的に知ることができたが、これから何を読みとることができるかが問題になってくる

→読み取れるものが少ないのならばもっと質問項目を変えていく必要もある
- PUC 学生によるプロジェクトの立ち上げ
 - ◆ 正確なデータとして調査結果を信頼できるものにするためには、ある

程度の調査の数を確保しなければならないが、J-CaJa が調査できるのは 1 年間で渡航する 2 度だけである

→J-CaJa が日本にいる間に PUC 学生に協力してもらいニーズ調査を行ってもらうために、「ニーズ調査プロジェクト」を PUC で立ち上げてもらうという案がある。そのためにはしっかりとした PUC 学生のメリットを提示する必要がある

➤ 協力相手（調査対象校）への配慮やメリット

◆ 今回調査を実施したが、対象校への実質的なメリットは考えられていなかった。教員の時間を割くことだけでなく、授業の妨害や援助の期待を招くことにもなり得る

→調査される側のメリットをしっかりと考え、また調査の相手には J-CaJa として何を目的に調査を行っているのか、調査結果をどのように生かす予定であるのかをしっかりと伝え、活動を理解してもらった上で実施する必要がある

文責：大福

ミーティングの記録



1日目(2月26日)ミーティング記録

議題

1. 活動の振り返り
2. 明日のスケジュール確認
3. ひろしまハウス訪問について
4. 会議後の作業について

1. 活動の振り返り

8:00	プノンペン 到着
9:00	朝食(プノンペン空港)
11:00	ゲストハウス「Capitol」到着
13:30	ひろしまハウス 訪問
15:00	昼食
17:00	Meeting

2. 明日のスケジュール確認

7:30	朝食(希望者のみ)
8:15	ゲストハウス 出発
8:30	バス乗車、Siem Reap へ
14:30	Siem Reap 到着予定
16:00	Welcome Party

3. ひろしまハウスの訪問について

<翻訳された絵本を見ての意見>

- ・翻訳した言語の貼り方の問題もあるのではないか
 - 翻訳部分がキレイに書かれていると、読みたいという気持ちを持たずことが出来るのでは？
- ・ひろしまハウスの絵本は日本語の絵本を翻訳したものが大半であった。しかし、

日本語の部分は隠されてあった。

- Kiriの小学校に寄付した絵本については、日本語という言葉も大事ということで日本語部分を残していたが、児童たちは日本について学習しているわけではない。いららないのでは？

その環境に合った翻訳が必要である。

<感想>

- ・実際に指導している所が見たかった
- ・運営は現地人のみで行っていたが、お金の部分は日本の団体に頼っている
- ・活動の効果・目的が曖昧
- ・近所の人たちも図書館の本を閲覧することが可能である
- ・日本語を勉強している団体であるので、交流学习の意味付けはしやすそうな感じであった(もし、シエムリアップにあったら…)

4. 会議後の作業について

<パワーポイントの作成>

- ・J-CaJa 紹介(末兼、松本)
- ・Discussion(浦野)
- ・リフレクション(増田)
- ・ABC&Yamamoto School(肥田)

文責：肥田

2日目(2月27日)ミーティング記録

議題

1. 本日の活動内容
2. 明日のスケジュール確認
3. 賢一先生指令の活動報告について
4. J-CaJa 紹介のパワポ練習
5. Yamamoto School では何を行うか

5. 本日の活動内容

7:30	朝ごはん
8:30	バスに乗車、シェムリアップへ
16:00	シェムリアップ到着、Dream Villa へと向かう(成一さん・曾利と合流)
16:30~	Welcome Party
18:30	晩ごはん
20:00	大福：テアロムとの Meeting へ 他メンバー：ナイトマーケットへ
22:00	Meeting

6. 明日のスケジュール確認

6:30	大福と曾利は Omiya 小学校へ
7:00~	朝ごはん
7:50	Dream Villa 前に集合
8:00	Yamamoto School を訪問
9:30	Schedule orientation - 末兼&松本の J-CaJa 紹介
11:30	Lunch
15:30	Kok Chan 小学校への準備 (※正装:シャツと黒のパンツ)

7. 賢一先生指令の活動報告について

担当：曾利、浦野

- 毎日、その日の活動内容をまとめて Facebook の J-CaJa ページに写真と共にアップする事

8. J-CaJa 紹介のパワポ練習

<発表内容に対する意見>

曾利：Vision を説明した後に・・・今行っている3つの活動がどう Vision に繋がっているのかが見えてこない。それなら、この前、純太達が報告会で発表した内容を持ってくればいいのか？

松本：今回は PUC の方にプレゼンするから、PUC と協同したら、こんなことが出来るよねという提案に重きを置いているので、そこまで掘り下げて Vision に繋げる必要はないと考えている

増田：上から目線の英語ではないか

平川：

- ・全体的に作り直すのがいい。
- ・Vision と活動の繋がりが全く見えてこない
→Vision をオブラートに包んでみてはどうか。例えば、教育改善を行う事が出来るための模索を行うなどに収める等(カンボジアの学生と一緒にしようっていうスタンスのものでないと、学生もいい思いはしないのではないか)
- ・パワポ自体が見にくい(図が分かりにくくいし、写真を入れた方がいい)

- ・最初から最後までの流れは良い
- ・丁寧に説明しないといけない部分と、そうでない部分を分けて作っていくのがいい
- ・なぜ、今回渡航してきたのかという説明が成されていない。今回何をしないといけないのかということを中心に話を進めること

9. Yamamoto School では何を行うか

担当：角谷、松本

- ・先生を対象に交流学習に対するアプローチを行う

※全員で行く必要はないのでは？

- 担当以外のメンバーは、小学校訪問などを行えば、時間を有効活用出来る。しかし、明日いきなり小学校に行きたいというのは現実的に厳しいので、Ymamamoto は全員で訪問し、ABC and Rice への訪問時にABC 組と小学校訪問組に分かれたいとPUC に提案すること

文責：肥田

3日目(2月28日)ミーティング記録

議題

1. 活動の振り返り
2. 明日のスケジュール確認
3. Yamamoto School の訪問報告
4. Discussion について
5. 明日のコックチャン訪問について

12:00	Lunch
14:00	・コックチャンで Activity ・肥田、松本、末兼は途中で ABC へ出発
16:00	・コックチャンは継続して活動 ・ABC に訪問

10.活動の振り返り

6:30	大福と曾利は Omiya 小学校へ
7:00	朝ごはん
8:00	【角谷・浦野・増田・成一さん】 Yamamoto School へ 【末兼・松本・肥田】 J-CaJa 紹介のパワポ最終調整
10:00	・ Schedule 確認 ・「交流学习」に関する Discussion
12:00	昼食
13:00~	休憩
15:00	・パワポ発表 at PUC ・コックチャン小学校での Activity 準備
18:00	夜ご飯
21:00	成一さん出発
22:00	Meeting

11.明日のスケジュール確認

7:30	・大福・浦野は Omiya 小学校へ ・他メンバーは朝ごはん
8:30	コックチャンへ出発 コックチャンで Activity

12.Yamamoto School の訪問報告

- ・先生方へ提案を行ったところ、交流学习に対して歓迎的ではあった。来年度は先生が変わるが、年間計画を作成すれば、上の担当に話を通してもらえるとのこと
- ・過去に違う学年ではあるが、交流学习(手紙交換?)の経験がある

<課題点>

- ・6月の時点では日本語学校の生徒はあまり日本語を話せないため、最初の頃は十分な交流は出来ない可能性がある

※ネットが普及し次第、先生方に挨拶メールを送る

13.Discussion について

- ・最初に成一さんが導入として、日本における交流学习の位置づけについて紹介し、その後2グループに分かれて話し合いを行った

<Discussion 項目>

- How(そんな交流学习の方法があるか?)

- カンボジア児童達の交流学習における benefit

しての交流も普通の授業に“美術”が含まれていないため描いてもらうことは難しいかのしれない

【Group1(成一さん、松本、浦野、末兼)】

・ Nara からの質問

①「カンボジアの benefit はと言うが、日本側の benefit は？」

- 日本人側、答えられず
- 成一さんの提案

: 日本のメリットは、カンボジアの Image が “Poor” というものが強いが、そのイメージを払拭させることができる

②「なぜ、小学校にこだわる？中高校生の方が生徒のコントロールが容易であるし、PC の問題も克服できる可能性が高い」

- Vision からは離れてしまう

・ How(どのような方法で交流学習が出来る?)

- HP や Facebook を使用
 - ネット環境の問題
- 郵便(ポストカード)など
 - 年に 2 回の渡航では成果に繋がらない
 - Movie の場合は物理的に難しい

【Group2(角谷、増田、肥田)】

- ・ Movie や Picture が最も良い方法
- ・ Skype は厳しい。また、絵を使用

5. コックチャンでの活動について

- ・ アイスブレイキングでは「竹の子ニョッキ」を行う
- ・ 午前中はポストカード、午後はガイドブック作り
- ・ DVD は 4 クラスあるため、4 台のパソコンを使用して各クラスで上映

文責：肥田

4日目(3月1日)ミーティング記録

本日のスケジュール確認

8:00	コックチャン到着 あいさつ
9:00	アイスブレイキング
11:00	ポストカード作成
12:00	昼食
13:00	休憩
14:00	ポストカード・ガイドブック作成
16:00	ポストカード・ガイドブック完成
17:00	PUCにて翻訳

情報共有

<図書研修組> 9時~16時

◎感想

- ・コミュニティを大事にしていた。また、児童達の絵本に対する興味関心はすごかった。(浦野)

<コックチャン小学校組>

◎感想・反省

- ・ガイドブックではPUCの生徒がテーマを決めてコックチャンの生徒が書き写すだけだった。もっと連携を深めていってコックチャンの生徒がテーマを決めたりできれば活動の意義ができるのでは?また、今後の活動内容を考えな

おせたらコックチャンでも活動できるのでは?(末兼)

- ・一年間通った奥坂での活動を簡潔できて感無量。ポストカードは増田 角谷で持って帰る。(角谷)

- ・アイスブレイキングが準備不足で、ムービーが時間なく見せれなかった。

そこでアイスブレイキングの時間をムービー鑑賞にあてればよかった

→事前の予定確認などもっとつめておくべきだった。(松本)

- ・ポストカードを完成出来てよかった。奥坂の感想など反応は後日共有する。しかし、反省点として、ムービークラブで作成しているはずのムービーを児童達に見せることが出来なかった。(増田)

- ・日本の遊びなど大勢でできるゲームを考えるべき。例えばダンスなど。

- ・ABCは時間がすぎてしまい児童も帰ってしまっていた。→明日謝罪し再予約をとる。(肥田)

諸連絡

- ・PUC組は明日は6時にホテル前集合

文責:松本

5 日目 (3 月 2 日) ミーティング記録

議題

5. 本日のスケジュール
6. 図書研修 反省
7. コックチャンでの活動 感想・反省

14. 本日のスケジュールについて

本日の活動スケジュール

8:00	コックチャン到着 あいさつ
9:00	アイスブレイキング
11:00	ポストカード作成
12:00	昼食
13:00	休憩
14:00	ポストカード・ガイドブック作成
16:00	ポストカード・ガイドブック完成
17:00	PUC にてポストカード・ガイドブック英訳

15. 図書研修 感想について

- Omiya 小学校ではコミュニティを大切にしていた

- 児童の図書に対して強く興味・関心を持っていた

16. コックチャンでの活動 感想・反省について

反省

- アイスブレイキングが準備不足
 - 大衆を相手に行える単純な遊びを一つ考えておく必要がある
- 時間不足により奥坂小学校のムービーを見せることができなかった
 - 当初、奥坂小学校の児童から送られた歌とリコーダーのムービーを見せる予定だったが時間不足により見せることができなかった
 - 事前に話し合いの時間を十分に設け、詳細まで話し合うべきである

感想

- PUC との連携をより強固なものにすれば J-CAJA 側も活動内容も細かく把握することができ、活動の意義も生まれてくるのでは
- 約一年間活動した奥坂小学校・コックチャンでの交流学习がひとまず完結し達成感があった

文責：増田

6 日目 (3 月 3 日) ミーティング記録

議題

- 1 本日の行程
- 2 本日の振り返り
 - 2.1 Omiya セレモニー
 - 2.2 Omiya ワークショップ
 - 2.3 Kiri ワークショップ
 - 2.4 図書館調査
- 3 帰国組からのお言葉

1 本日の行程

7:00	出発
8:00	Omiya 到着
8:30	セレモニー開始
9:30	WS
11:00	バン移動・昼食・移動
14:00	Kiri 到着
14:30	WS、調査
16:30	終了
22:30	ミーティング

2 本日の振り返り

2.1 Omiya セレモニー

- 図書を導入することで、地域を活性化し、コミュニティを活性化するという、テアロムの考えが表れており、実際に参加することで、理解が深まった。
- コミュニティの活性化や、継続を考えていくなら、さらに保護者を巻き込む活動が必要になる。保護

者の利用者獲得、保護者同伴で図書館にくる工夫などを考えて行き、図書導入を無駄にしない、活動を模索したい。

2.2 Omiya ワークショップ

- セレモニーの参加者である大人も WS に参加してくれたこともあり、目的以上の成果があった

2.3 Kiri ワークショップ

- やるならやるで、もう少し詰めてワークショップを行うべきであった。例え三島高校の急なお願いであっても、引き受けたからにはしっかりこなすことが大事。

2.4 図書館調査

- 先生やスタッフと一緒に作って調査項目を、達成すべき目標にするなどし、評価する側、される側でコミュニケーションを取る必要がある。

3 帰国組からのお言葉

角谷

- ディスカッションとリフレクは今後の活動を左右する。重要。しっかり頑張る。

肥田

- 半年後にしかすることが出来ない、しっかり今出来ることをすること。

文責：浦野

7日目(3月4日)ミーティング記録

議題

1. 本日のスケジュール確認
2. 本日の振り返り
3. ニーズ調査振り返り
4. ディスカッション振り返り
5. 諸連絡

1.本日のスケジュール確認

時間	内容
8:30	モックネヤック小学校到着
8:40	パソコンのクラスを見学
9:00	ニーズ調査開始
10:30	PUCに到着
11:30	昼食
12:30	ディスカッション準備(J-CaJa内)
14:30	ディスカッション
17:00	活動終了
17:30	夕食
18:30	ホテル着
20:00	ミーティング

2.本日の振り返り

<モックネヤック小学校の情報>

◎人数

全校生徒：2483人

全教員：66人

◎外国からの支援

支援は多く、シティエリアにあるため支援が入りやすい。

<コンピューター教室の見学>

◎授業内容

・タイピングやオフィスを使った基本的なスキルを身につける。利用できる生徒は6年生のみ。しかし、先生は基本的なスキルしかない。

◎先生への質問

学校外で子どもたちがパソコンを使用することがあるのか? →先生:ない

本当に授業で教える必要があるのだろうか?

<ニーズ調査の結果>

◎子どもたちに対して

質問項目

- ①「学校はどういう場所であるか」
- ②「家ではどの程度家事を手伝っているか」
- ③「児童は今までにきた外国人見学者を覚えているか」

わかったこと・感じたこと

・質問①が「勉強の場」「知識を得る場」など似たような回答になった。

◎先生に対して

質問項目

- ①「学校にいる間、児童との会話はどれくらいあるか」
- ②「生徒との会話はどのような内容か」

わかったこと・感じた点

- ・子どもが学校に来なくなったときは、家へと訪問して働きかけるようにしているが家庭訪問を何度もしているわけではない。
- ・先生は気軽に話しかけられるような存在ではなく、ほとんどの子どもたちは先生に話しかけない。

<授業見学>

◎授業内容

- ・児童が二人ずつペアとなり、どちらが早く音読できるかを競うゲームをしていた。

◎観察していて気付いた点

- ・家庭の事情により、欠席が 11 人もいた。
- ・クラスに話せない人がおり、手話を使って会話する。

3. ニーズ調査振り返り

<子どもたちに対して班(PUC 学生曰く)>

- ・質問内容に対してはだいたい Good で、授業中に調査をするのは OK だという
- PUC 学生は「支援する方」という視点があるのではないかな？

<先生たちに対して班(PUC 学生曰く)>

- ・カントリーサイドというしぼりで見てもいいのではないかな？
- ・本音を聞き出すのはカンボジア人からみても難しい。→ただこのニーズ調査では本音が聞けたのではないかな。

4. ディスカッション振り返り

<ディスカッション内容共有>

◎PUC 学生の意見

- ・子どもたちがドロップアウトする原因として、個人的な要因と社会的な要因がある。特に

「家族」「コミュニティ」「学校」があげられる。

→大きな理由として「欠席」を挙げていた。

そして、欠席が重なると子どもたちは先生を恐れたり、授業についていけなくなったりしてドロップアウトしてしまう。

・学校を休む要因を探して行くことで、ドロップアウトする原因を探れるのではないかな。

・ドロップアウトの原因が全て「欠席」に繋がるという考え方

・時間がないのなら J-CaJa メンバーが帰った後でも調査できるようにプロジェクトを立ち上げたらどうかという意見が出た。

→もし立ち上げるなら、PUC 学生に対してしっかり意味付けをしないとけない。

5. 諸連絡

明日の日程確認

時間	内容
7:00	ホテルロビー集合し、PUC へ
8:30	PUC 出発
8:30	Pouk 小学校訪問
14:30	ディスカッション

文責：松本

8日目(3月5日)ミーティング記録

議題

8. 本日のスケジュール確認
9. ニーズ調査の振り返り
10. ディスカッション振り返り
11. 諸連絡

17. 本日のスケジュール確認について

時間	内容
7:00	ホテルロビー集合し、PUCへ
8:00	PUC 出発
10:00	小学校到着 インタビュー
12:00	小学校出発
13:00	昼食
15:30	PUC 到着
16:00	ディスカッション
17:00	活動終了
17:30	夕食
18:00	ホテル着
18:30	ミーティング

18. ニーズ調査の振り返りについて

<インタビュー>

質問項目:昨日のディスカッションにて改善したもの

- ・PUC側のニーズ調査をすることに対する意味づけが必要。
- ・調査される側の学校に対してもメリットが必要。
- ・昨日急遽ニーズ調査のディスカッションを入れたことで思わぬ形でいい方向に向かっている。
- ・ニーズ調査に対するプロジェクトまで話がきけている
- ・インタビューを通して事実を色々と断片的に

知れたのは良かったけれど、これから何を読みとることができるかが問題になってくる。読み取れるものが少ないのならばもっと質問項目を変えていく必要がある。

・ここでモチベートされたメンバーをどう巻き込めるかが重要。

19. ディスカッション振り返りについて

<ディスカッション内容>

「プロジェクトを運営するにあたって一番重要なことはなにか」についてのディスカッション

(ア) self-realization

(イ) return (benefit, confidence)

(ウ) contribution to society

①と③の意見が多かった。

ゴールはどれも社会貢献であり、自己実現をするためにプロジェクトを立ち上げることが間違いというわけではなくファーストステップが違う。

・PUCとJ-CaJaと一緒に活動していく前にJ-CaJaの考え(社会貢献を目的として活動していること)を知ってほしかったからこのディスカッションを行って意識をフラットにすることができた。

20. 諸連絡について

次の日の日程確認

時間	内容
7:00	ホテルロビー集合
7:30	PUC 出発
8:30	ABC
14:00	リフレクション

文責:末兼

9日目(3月6日)ミーティング記録

議題

- 12. 本日のスケジュール
- 13. ABC and rise 訪問
- 14. リフレクション
- 15. PUC 旧メンバー・J-CAJA ミーティング

21. 本日のスケジュールについて

7:30	PUC 着
8:00	ABC
11:00	ホテル着
13:00	昼食
14:30	リフレクション
17:00	旧メンバーと追加ミーティング
18:00	ナラ宅にて夕食

22. ABC and rise 訪問について

- プレゼンテーションの結果交流学习にとっても興味を持っていた
 - 特にスカイプミーティングに興味を示していた
- コックチャンでの交流学习で作成したガイドブックを見せたところとても関心を持っていた

23. リフレクションについて

- 交流学习に関する意味づけが薄い

- J-CAJA 側の意味づけが曖昧なためこのような結果になった
- 時間がない、忙しいなどネガティブな意見も出ていた
 - 意見はネガティブだが PUC 学生の本音を聞くことができたのはよかった
- 新メンバーを巻き込んでディスカッションすることができなかった
 - 新メンバー、旧メンバー間のモチベーションの違いが大きく見られた
- 年間計画は作成したが成果物としては物足りない

24. PUC 旧メンバー・J-CAJA ミーティングについて

- 連携を強化したいという割に Facebook の更新率が低い
- PUC 学生の中には時間に余裕がない人もいるためこなせるタスクに限られる
- 時間の関係もあり翌日(3月7日)に再度ミーティングを行う
 - 交流学习についてのリクルートプレゼンを行い、協同する PUC 学生を探す

文責：増田

反省と展望



- 活動を通して、失敗してしまったと思うことや、反省点は何か。またそれらに対する改善点は？

<活動に関する反省点・改善点>

まず始めに活動内容の共有不足が反省点として挙げられた。具体的には、J-CaJa 紹介プレゼンやWS、小学校調査、図書館評価等の活動の際に、担当者以外の者が発表・活動内容や活動意義・目的などを理解していないことがあった。そのため、担当者が活動に参加できなかった活動では、臨機応変に対応することが難しくなってしまった問題や、調査や評価での質問項目が理解できなかった問題が発生した。そこで改善策としては担当以外の者でも企画段階から全員が当事者意識を持ち、全ての活動内容を把握することが挙げられた。

次に活動目的の理解不足も挙げられ、ひろしまハウスの訪問やPUCプロジェクトの見学といった活動において、明確な活動目的を設定できなかった。そのため、訪問・見学の際に見るべき視点や枠組みが定まらず、質問が出なかったり、メンバーが活動意義を感じられなかったりといった問題が生じた。改善策としてはスケジュールを早めに作成することで、活動目的が曖昧な活動を日程に詰め込むといったことを防ぐことができる。また、SV活動企画段階からPUC側と密に連絡を取り議論することで、PUCが主導する活動においても目的が明確な活動を設定できると考える。

その次にはスケジュールの把握不足が挙げられた。不規則的なスケジュールの管理をPUC側に任せてしまっていたため、次の活動の時間を意識しながら動くことができなかった。そのため、ABCs and Rice訪問に遅刻してしまった。そこで、J-CaJa側にもスケジュール把握の担当を付けるという改善策が出た。また、全体を通して新メンバーの加入や旧メンバーとの信頼関係を確認したことで、現地での活動の重要性を再認識した。しかし、今回は相対的に渡航メンバーが少なく、新メンバーとの関係性の構築に課題が残った。次回は全員渡航を目指す。

<PUC 側の SV 目的に関する反省点・改善点>

今回の SV では、ほぼ J-CaJa が提案した活動を PUC 側に協力してもらった形で実施したが、PUC 側の活動意義やメリットが不明瞭であった。今後活動していく中で、双方に活動意義を持たせる必要がある。改善策としては今回土台を作った PUC との協働プロジェクトに重きを置いて活動することで、J-CaJa と PUC が共通の目的の元、活動できる。また、SV 活動企画段階で PUC 側と密に議論を行うことで、双方にとって意義のある活動を設定できる。

<リフレクション方法に関する反省点・改善点>

Facebook を利用したリフレクションは、当日の振り返りができることや、活動内容や意見がメンバー間で共有できることなどメリットは見られた。しかし、一日の振り返りがメンバーの負担になりすぎる点や、コメント欄の使用が活発でなかったことなど、課題も見られた。改善策としては引き続き Facebook を利用するが、書く負担が少なく、議論が活発になるような質問項目を設定する。

文責：松本

- ▶ 活動の中で、うまくいったことは何か。そしてそれらはなぜうまくいったのか、どうこれからにつなげていくのか。

今回の活動でうまくいった点は2点挙げられる。

まず1つ目に挙げられるのが一部の活動、ディスカッションやリフレクションでいい結果を残すことができたことである。渡航メンバーが少ないにも関わらず効率的に動くことができ、今回のSVのゴールである「PUCと本気で連携していくための土台作り」へ限りなく近づくことができた。今後PUCとの関係において、ターニングポイントとなるSVになったと考える。このような結果にたどり着くことができたのは、2つの理由があると考えられる。1つ目は事前にしっかりとゴール設定とそのゴールをメンバーが理解し、行動に移すことができたためであると考えられる。ゴールに近づくためにディスカッションやリフレクションでは細かな目標設定ができ、前夜に効果的な準備ができることとなった（例：ディスカッション時、必ず伝えなければならないことの英文作成）。すべきことが明確になっていたのがよかったと考える。2つ目としては、これまで築き上げてきたPUCとの信頼関係によるためのものである。継続的に渡航することでこちらの意図をすぐに理解してくれる一部PUC学生の存在によりスムーズに進めることができたのである。今までの渡航やPUCを巻き込んだ活動が実を結ぶ結果となった。

次に2つ目であるが、活動中のFacebookによる日々の振り返りが挙げられる。この振り返りを行うことで、各メンバーの思いの内をお互いがすぐを知ることができ、気付きや体調の違和感も共有できた。また国内メンバーとの意思伝達も行うこともできた。理由としてはSNSという共有スペースに他のメンバーの意志や意見があり、気軽に閲覧することができたためであると考えられる。また渡航メンバーが日々のタスクをしっかりとこなし、毎日更新していたことも大きいと考える。今回この振り返りを行い、いい効果を実感しているメンバーが多いことから、今後PUCにも共有できるようにし（Facebook上に少人数グループ作成）、渡航期間中により密な関係生を持つことのできるようにすべきなのではという案もでてくる。

文責：角本

会計

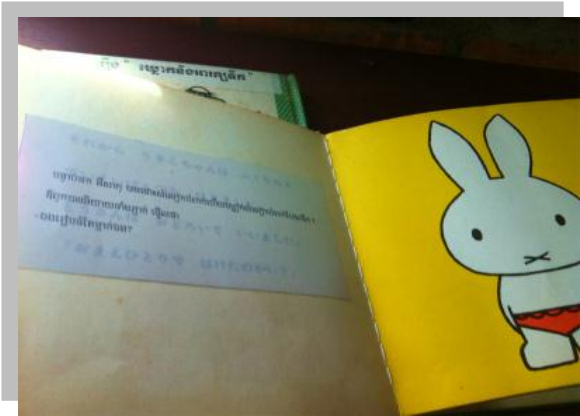


日付	項目	単価	個数	一人当たりの値段	小計	備考
2/19/2013	お土産	¥6,100		¥359	\$66.00	
2/26~3/3(8人ver)						
2/26/2013	朝食	\$35		\$4.36	\$35	
	トゥクトゥク	\$7	2	\$1.75	\$14	
	ホテル	\$25		\$3.13	\$25	ブノンベン
	トゥクトゥク	\$3	2	\$0.63	\$5	
	昼食	\$15		\$1.88	\$15	
	トゥクトゥク	\$2	2	\$0.50	\$4	
	水	\$1		\$0.13	\$1	箱買い
	バス	\$6	7	\$4.81	\$39	ブノンベン→シエムリアップ
	シムカード	\$11		\$1.38	\$11	
	軽食	\$8		\$1.00	\$8	
	夕食	\$9		\$1.13	\$9	
2/27/2013	朝食	\$10		\$1.25	\$10	
	夕食	\$26		\$3.25	\$26	
	トゥクトゥク	\$2	2	\$0.50	\$4	
2/28/2013	昼食	\$41		\$5.13	\$41	
	シム	\$1		\$0.13	\$1	
	夕食	\$38		\$4.75	\$38	
3/1/2013	昼食	\$43		\$5.38	\$43	
	夕食	\$32		\$4.00	\$32	
	トゥクトゥク	\$1		\$0.13	\$1	
3/2/2013	トゥクトゥク	\$2		\$0.25	\$2	
	朝食	\$8		\$0.94	\$8	
	昼食	\$24		\$3.00	\$24	
	夕食	\$31		\$3.92	\$31	
	パーティ	\$58		\$7.20	\$58	
3/3/2013	バン	\$30		\$3.75	\$30	
	パーティ	\$5	8	\$5.00	\$40	
図書研修(3日間) 2/28~3/2						
2/28/2013	朝食	\$2		\$0.25	\$2	
	昼食	\$7		\$0.88	\$7	
	トゥクトゥク	\$15		\$1.88	\$15	
	WS用	\$27		\$3.35	\$27	
3/1/2013	朝食	\$2		\$0.25	\$2	
	昼食	\$7		\$0.88	\$7	
	トゥクトゥク	\$15		\$1.88	\$15	
	トゥクトゥク	\$1		\$0.13	\$1	
3/4~3/7(6人ver)						
日付	項目	単価	個数	一人当たりの値段	小計	備考
3/4/2013	トゥクトゥク	\$2		\$0.33	\$2	
	トゥクトゥク	\$5	2	\$1.67	\$10	
	軽食	\$3		\$0.42	\$3	
	昼食	\$38		\$6.31	\$38	
	夕食	\$12		\$2.04	\$12	
3/5/2013	トゥクトゥク	\$1		\$0.17	\$1	
	夕食	\$10		\$1.67	\$10	
3/6/2013	トゥクトゥク	\$2		\$0.33	\$2	
	朝食	\$5		\$0.83	\$5	
	トゥクトゥク	\$5	2	\$1.67	\$10	
	トゥクトゥク	\$2		\$0.33	\$2	
	昼食	\$20		\$3.35	\$20	
	トゥクトゥク	\$3		\$0.50	\$3	
3/7/2013	昼食	\$25		\$4.17	\$25	
	軽食	\$3		\$0.50	\$3	
	ホテル	\$223		\$37.17	\$223	シエムリアップ
					合計	\$369
全日程合計					\$1,268	¥123,874

写真館



ひろしまハウス



圖書研修



図書館セレモニー





交流学习





ディスカッション



おわりに

今回のSVにおいて、準備段階から渡航までを含めた、成果の最たるものは、関係性の強化であると感じる。

J-CaJaのメンバー内での、PUCやEPSと言った連携する団体との関係が、これまでよりも一層強く、固いものとなり、個人個人での自覚や責任感がメンバーの中で生まれたのではないかと考える。

今後、本プロジェクトを中心となり支えていく者、社会に出る者と、各々の道は様々ではあるが、J-CaJaとしての成果、個人個人での経験、成長を活かし、より良い社会の実現のために邁進してほしいと思う。

本プロジェクト、関係者各位の益々の発展を願い、SV報告のまとめとしたい。

文責：浦野